

氏名 高橋 公雄

学位の種類 博士(文学)

学位論文題目 ウィリアム・ゴールディング研究—悪の視点から—

(A Study of William Golding's Novels from the Viewpoint of Evil)

1. 論文内容の特色と要旨

高橋公雄氏の学位請求論文(本文159ページ+参考文献一覧7ページ)は、ノーベル文学賞を受賞したイギリス人作家ウィリアム・ゴールディング(William Golding 1911-1993)の主要な小説を比較的初期の作品から後期の作品まで、各章に分けて主に「悪」の問題に焦点を当てて論じている。本論文は高橋氏がこれまでの長い研究生活の中で書き上げてきた論文と本学大学院博士後期課程進学後の3年間における研究成果を一つにまとめたもので、「悪」の視点からゴールディングという難解な作家の全体像を明らかにしようとするものである。ゴールディングは日本ではまだまだ十分に研究されているとは言えず、この作家の研究書や論文も多くない現状の中で、ゴールディングの小説を作品ごとに「悪」がどう扱われているかについてテキストを精読することで明らかにし、その結果初期の作品から後期の作品に向かうに連れて悪の扱われ方に変化が生じていることを指摘している。このように「悪」の問題に焦点を当てて、主要作品のほとんどを論じている研究書は他になく、公刊されれば間違いなく日本における数少ないゴールディングという作家の全体像を明らかにする研究書の一つになるであろう。以下本論文の内容を各章ごとに概観して、本論文全体の特色とその評価を述べることにしたい。

本論文は三部構成で、全体で9章から成っている。序論では過去の思想家たち、例えばアウグスチヌスや心理学者エーリッヒ・フロムなどの「悪」についての概念を援用し、以下こうした観点からゴールディングの作品における「悪」を検討する。

第一部第一章「ゴールディングの世界へ—『蠅の王(*The Lord of the Flies*)』論」では、ゴールディングの小説の中でもっともよく知られている初期の代表作『蠅の王』を興味深く論じている。この小説では、一見楽園を思わせる南方の孤島を舞台に、そこに不時着した「無垢(*innocence*)」と思われる少年たちの集団が仲間の「人狩り」へと向かう不気味な様子を描き、人間の内に潜む「獣性」という「悪」を見事に描いていると指摘する。

第二章「反ウェルズ的見解を契機として—『後継者たち(*The Inheritors*)』論」では、この小説が空想科学小説家H・G・ウェルズの人類史観を皮肉る形で、言語未発達で「無垢」の状態の旧人ネアンデルタール人の黄昏と滅亡を一人の旧人の意識を通して描き、それに続いての新人類ホモ・サピエンスの台頭を巧みな視点転換によって描いているが、それは

「無垢」の状態の喪失を暗示するものでもあるという。

第三章「神なき人間の戦いとは—『ピンチャー・マーティン(*Pincher Martin*)』論」では、主人公マーティン個人の墮落、個人の悪に焦点を当てている。難解なこの小説の冒頭部でマーティンは死に、あとは煉獄での苦闘を表現するかのようになり、フラッシュ・バック的手法によって彼の過去が暴かれ、その善悪の判断は最終的に読者に委ねられているという。ゴールディング的な「曖昧性(ambiguity)」を残す作品であると指摘する。

第四章「重力の恩寵—『自由落下(*Free Fall*)』論」では、主人公サミイが一人の女性ピアトリスを我が物にするために自由な意思を行使し、逆に「自由な転落」を辿ることになる過程を描いたものであり、この小説は「悪」の問題の扱い方において転換点となる作品であると指摘する。つまりこの小説以後、悪が常に「宗教」や「科学」等の問題と複合的に扱われるようになるのだという。

第二部はゴールディングの中期の作品を主に論じている。第五章「無垢なる仕事への異議—『尖塔(*The Spire*)』論」では、狂気的な宗教的情熱で「尖塔」を建てたジョスリンという助祭の、自らを神に選ばれた者と信ずる「無知」に由来する「宗教的情熱」の持つ二律背反的な内実を、彼の情熱によって建てられる尖塔建設の犠牲者たちを描くことでアイロニカルに暴いているという。

第六章「ピラミッドとは何か—『ピラミッド(*The Pyramid*)』論」では、この小説が、1920年代から1960年代のイギリスの田舎町を舞台に「ピラミッド」に象徴されるこの町の様々な社会的階層の人間関係を3つのエピソードが緩やかにつながったソナタ形式で描き出し、一見教養小説風でありつつ風俗小説風でもあり、内容的には「歪められた愛」をテーマに描いたものであるという。

第七章「見える闇、あるいは見えぬ光—『可視の闇(*Darkness Visible*)』論」では、この小説も前の『ピラミッド』同様に三部構成であり、第一部の中心人物マティは精神性の極北を示し、第二部のソフィは悪の極北を示すもので、第三部でこの二人が交差するが、この小説の題名が暗示するように、終わり方も含めてやはり「曖昧性」を残す作品となっているという。これら本論文の第二部で検討された小説では、「悪」の問題は重層的、複合的に描かれていると指摘していることは興味深い。

第三部はゴールディングの後期の大作で、同一主人公のイギリス人青年トルボットが赴任先の植民地オーストラリアへ辿り着くまでの航海記を名付け親の貴族に手紙で送るという書簡体形式で描かれた三つの小説から成る「海洋三部作」を論じたものである。

第八章「これはいかなるポリフォニーか—『通過儀礼(*Rites of Passage*)』論」では、この小説は後に「海洋三部作」の一つとして出版されることになるが、この第一作目の『通過儀礼』が出版されると大きな注目を集めたが、パロディ風なメタ・フィクションとしても読めるものである。この小説の時代背景は19世紀初頭であり、船という閉ざされた世界で船長を頂点に上級船員と下級船乗り、乗客も当時のイギリスの社会階級の縮図を示すものとなっている。この小説では特にイギリス国教会の牧師であるがロマン的資質の持ち

主コリーの狂氣的振る舞いの後の自殺という衝撃的体験を常識人トールボットが味わうことになる。そこにロマン的なるものに対するこの作者のアイロニーを指摘している。

第九章「トールボットの払った代価 :物悲しい結末—『この世の果てまで—海洋三部作(*To the Ends of the Earth: A Sea Trilogy*)』論」では、前述したようにトールボットを主人公とする『通過儀礼』、『接近戦(*Close Quarters*)』、『この世の炎(*Fire Down Below*)』という三部作が合本にされ『この世の果てまで』という題名で後に出版されることになった長編を論じている。この海洋三部作は、主人公トールボットが航海中に出会う個性豊かな人物たちとの出会いと別れ、波乱万丈の出来事との遭遇を繰り返しながら、オーストラリアに辿り着くまでの間にトールボット自身が人間的成長を遂げ、美しい女性とのロマンティックな恋愛を経て結婚に至るという意味では、19世紀のピカレスク的な教養小説、あるいはそのパロディとして読むことはできる。しかしその結末は「ハッピー・エンド」とはならず、どこか「物悲しい」結末になっているという。そこに合理主義の精神だけでは割り切れないロマン主義的精神の介在を見ている。後期の「海洋三部作」では、「悪」の問題は後景に沈んでいるように見えるが、やはり厳として扱われているという。

結論では、英米におけるゴールディングの主要な先行研究について概観した上で、ゴールディング小説の結末における問題解決の「転換技法(*gimmick*)」が、各小説作品でどのように扱われているかを検討しつつ、初期から中期、そして後期の小説作品における「悪」の描写の推移と関連付けてまとめている。

2. 論文審査結果の要旨と今後の課題

以上のように、本論文はイギリスのノーベル賞作家であるが、日本では比較的研究されていないウィリアム・ゴールディングの小説作品を、初期の代表作『蠅の王』から中期の『尖塔』や『可視の闇』などを経て後期の大作である「海洋三部作」まで、「悪」の問題がどのように扱われ、またその扱われ方の推移を論述の中心に置きつつ、夫々の難解な小説をテキストからの引用を多用して丁寧に作品論として論じている。本論文に収録されている夫々の論考は、第三部の論考を除いては以前に書かれたものを修正して収録していることもあり、必ずしも一つのテーマを一貫して論じたものという訳ではない。むしろ夫々の章が興味深い一つの作品論でありつつ、全体としてゴールディング作品における「悪」の問題に収斂されるテーマを論じていて、この作家の全体像—合理主義的側面と、それだけでは収まらない一面—を明らかにしてくれている。このゴールディング研究が公刊されれば、我が国では数少ないゴールディング小説の研究論文として高く評価されるであろう。

今後の課題としてはゴールディングの晩年の長編小説であり、ある作家とその作家の伝記を書こうとする研究者との関わりをメタ・フィクション的に描いた『紙男(*The Paper Men*)』についての論考を本論に加えることであろう。これに加えることでゴールディングの主要作品を初期から晩年まで論じたことになり、ゴールディングの思想面だけでなく実験的な小説家として技法面からも光を当てることができるであろう。「語り」など小説技法

